

老いの日にも見放さず、捨て去らないで下さい

少し長いがまずテキストを朗読しよう。人は老いることを避けることはできない。体のコントロールをはじめ、情動コントロールも難しい。眠りも浅くなる。そのような中で、9 節の「老いの日にも見放さず、わたしに力が尽きても捨て去らないでください。」18 節「わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。」という懇願は身に詰まされだろう。

むろん、人生、若い時も、中年になっても、男女それぞれ固有の悩みや問題があるのだろう。そして、若者もやがて老いるのである。人は空気を吸いて吐き、ものを食べて排泄する。自分のものを持たずに生かされているこのようなりズムが失調し、若者でも老人のように衰弱しうるのである。

だから、6 節の「母の胎にあるときから/あなたに依りすがって来ました。あなたは母の胎からわたしを取り上げてくださいました。」17 節の「神よ、わたしの若いときから/あなた御自身が常に教えてくださるので/今に至るまでわたしは/驚くべき御業を語り伝えます。」もまた、真実な思いとして心に響く。

原文のことを言えば、1-3 節のほとんどは、詩編 31 編 2-4 節の引用、6 節はほとんど詩編 22:10-11 節の引用、12 節は詩編 22:12 節の引用で、全体として他の詩編の影響を受けている。たしか、ヴァルター・ベンジャミンだったと思うが、「コサージュ論」で、すべて引用文からなる本を書きたいと言ったとか！それはいわゆる「盗作」ではなく、先人の魂の呻きや喜びを受け継ぐことであり、自分は何か気の利いたこと、凄いことを言ったという自負心に溺れないためであろう。私たちが考えることなど先人が発言しているのである。このようなベンジャミンの考えは、単純な論理的、線的発展論などを拒絶したユダヤ人思想家・信仰者ならでは、であろう。

1. 老いて、力が尽きても (9, 18 節)

9 節 *ziqnāh* 老いた年代において、「私の力 (*kōhī*) が私を見放すとき」の「見捨てる」(*ta'azbēni*) は 十字架のイエスの叫びと同じ用語。18 節の「老いて白髪になっても (*ziqnāh wāšēbāh*) 見捨てないで (*'al ta'azbēni*)。自分の力が自分を見捨てるときに、主よ、自分を見捨てないでください」という表現の中に、老齢の弱さ、孤独感、そのような姿を見て、また、他者の神への信頼が揺らぎ、神が侮られないようにと願う。そして、神はそのような老齢の自分を見捨てることはない信頼する。

2. 生まれる前から知られ、護られてきた

こども讃美歌に「生まれる前から神様に護られてきた友達の誕生日です。おめでとう。」というものがある。この讃美歌は教会学校幼少科の奉仕者時代から心に響くものであったが、子どもたち、孫たちに囲まれ、自分が老いていく昨今、奇妙に思い出される素晴らしい歌詞である。子どもや孫がない形の祝福を受けている人も、誰かから生れてきたことは確かなことであり、「母の胎にあるときから/あなたに依りすがって来ました。あなたは母の胎からわたしを取り上げてくださいました。」という感謝の言葉を共有できるであろう。

3. 神の救い、憐れみを求め、賛美し、語り継ぐ

詩は、「わたしは主よ、あなたに信頼する」で始まり、信頼する「わたし」を辱め (*'ēbōwōšāh*) な

いでください」と懇願する。「信頼」がこの詩の基調である。禍への言及と救いの懇願が交互に登場してくる。「あなたの義において私を助けて (tassilêni) 逃がして下さい(ütəpallêni)」(2節)と願う。「恵みの御業」より「義をもって」(口語訳)の方がヘブライ語に忠実である。「あなたの耳をわたしに傾け、救ってください (wəhōwōšî'êni)」と叫ぶ。神は避難所、身を隠す「岩」、「砦」である。これは詩編に繰り返し登場してくる。荒れ野では、敵の前で、自分を匿い、隠すものが不可欠なのである。「わたしのために避難の岩となってください。なぜなら、あなたがわたしの岩だから。」という一見同義反復のような表現はすでに救われている私たちが救いを懇願することに他ならない。

このような懇願は、すでに聴き入れられた、自分の人生で聴き入れられてきたことを思い出し、詩人は神に賛美を捧げ、神の恵みの証言を語り継ぐと言う。5節「なぜなら、あなた、主なる神よ、あなたは私の希望」(tiqwāti)という「わたしの希望」という名詞による表現は力強い。この詩は何よりも賛美の詩なのである。5-8節は詩人の真実な経験であるからこそ、9-13節が生きてくるのである。15節のあなたの「義」も新共同訳は「恵みの業」と翻訳している。「わたしの口はあなたの義を語る」で充分であると思うが。16節、19節、24節の「あなたの義」も新共同訳では「恵みの御業」と翻訳されている。22節の「あなたのまこと」('āmittākā)は新共同訳でよいのだろう。

4. 22節に「琴」(nebel, harp、12弦琴?)が登場する。同じ節に「豎琴」(kinnōwr, lyre 22節)も登場する。8弦、10弦、12弦琴などがあつたらしい。芸術的な弦楽器による賛美である。パリのノートルダム寺院の礼拝におけるパリ大学の管弦楽団の演奏は素晴らしかった。弦楽器もさることながら、チューリップで聴いたポーランドの男性合唱団の素晴らしさも耳に残っている。スラヴ人(中欧・東欧に住みインド・ヨーロッパ語族スラヴ語派)の音楽の素質は傑出している。ウクライナへのロシアの侵攻は決して許されることではない!同じ「スラヴ系」(東スラヴ人としてウクライナ人、ベラルーシ人、ロシア人がおり、西スラヴ人にスロバキア人、チェコ人、ポーランド人がいる。南スラヴ人にはクロアチア人、セルビア人、ブルガリア人などがいる)の同系民同士の昨今の戦争の悲劇を思う。そうだからといって、米英あるいは西欧の勢力の尻馬に乗って軍事力増強を画策する国は決して輝いてはいない。主なる神賛美こそ人間のなすべきことである。